

一見馬鹿馬鹿しい話のようだが・・・

以前、究極の全自動トイレについて書いたことがあるが、<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/zenjidou.pdf> 世の中には一見馬鹿馬鹿しい話のように見えるが実は・・・というようなことは多々ある。

ある時は「尋常ではない人の思いつき」と一笑に付されるかもしれないが、時間が経てば価値ある話に変わるものもあるから馬鹿にはできない。手塚治虫の漫画やチャップリンの映画に登場したひとコマひとコマの中には、30年後・50年後には現実の物になっているものもあるのだから・・・。

< 1 > 寝ている間に・・・

昭和30年代に活躍した落語家が、マクラで使った古い都々逸にこんなのがあった。

「ままになるなら樋（とい）だけかけて 寝たままションベンがしてみたい」

そしてこれを試した人が返した返歌が

「寝たままションベンしてみたけれど はたで見るほど楽じゃない」

横着者が楽をして暮らすための方策として考えついたことを歌った都々逸だが、今や大病または手術がともなう事故などで病院に入院すると、これと同じような状態にしてくれるし、そのようなことは普通の人は誰でも知っている世の中になった。

この都々逸が出来た時代には「寝たまま排泄ができる方法」は、普通の人の暮らしの中では考えられないことだったので面白かったのかもしれない。

< 2 > 自己発電のすすめ

キャスター付バッグ（通称：ゴロゴロかばん）のキャスターが発電機になっていて、歩きながら発電した電気をバッグの中の充電器に蓄えておく。歩いていない時には携帯端末を接続しておくで充電電源として使用できる。さるカバンのメーカーがこんな商品を開発中だということが日経産業新聞で紹介されていた。

自動車はガソリンエンジンで走りながら、エンジンと同軸の発電機で発電したエネルギーを使うようになっている。近頃ハイブリッドカーが登場して、このあたりの概念がガラリと変わってきた。

自動車の機構を眺めてみても、エネルギーの有効活用の視点で検討されるべきテーマが沢山ある。

排気ガスを吹き出しながら走る車の排気口にミニ風力発電機を付けたらどうなるか？

時速60～80Kmで走る車は同速度の風を受けているのと同じである。車体のどこかに風力発電機を付けたらどうなるか？

灼熱の太陽で焦がされるボディの表面が太陽光発電素子でできていたらどうなるだろう？エコカーレースなどでは実現しているが、一般の商品としてはまだ登場してこない。

< 3 > 水商売はいかが

ベランダに大きめのポリバケツを設置して、雨樋からの水を集めるようにする。ベランダの植物にやる水は十分にまかなえる。植物に提供した水は養分として植物の体内に入り、葉面から出て天に帰って行く。

風呂の水は厄介だ。あれほどの容積の浴槽の水の他に、シャワーとして使う水も含めるとかなりの量の水の消費になる。入浴する人間の健康維持と気分の転換の効果はあるものの、蛇口から出て排水溝から出て行く間に何かを再生産するわけではなく、ただ流し去ってしまうだけである。大きな水の循環管理システムとしてはリサイクルされているかもしれないが、使用している現場での再生産の活動はされていない。

個々の家庭で再利用・再生産の仕組みが実現すれば、貴重な水資源の有効活用に繋がる。

風呂の水は排水後室外のタンクに貯蔵され、簡単な浄化を行う。前述の雨水をここで合流させても良い。

浄化された水は水洗便所のタンクに送られ、二つ目の役割に入る。

大量の水を消費するトイレと風呂の問題が解決して、家計にも貢献できる可能性がある。

< 4 > 配達革命

どのような山奥にも、離れ小島にも、各世帯に新聞と郵便が確実に届く。冷静に考えてみると、これは大変素晴らしいことであり、大変難しいことでもある。

今では郵便と新聞の他に宅配便が同じようなサービスを提供している。しかし、場所によっては手が足りないほどの配達量であったり、一日に僅かな配達しかない過疎地に郵便配達と複数の新聞配達と複数の宅配業者が入っていく効率の悪さもあったりするのが現状だろうと思う。新聞配達についてはそのような動きは見られたが、その他の分野では相変わらず価格と速度を競い合っているばかりで、そのしわ寄せが従事する労働者にのしかかっているようにも見える。

小学校の頃に過ごした東北地方の山村では郵便配達が新聞を持ってくれた。また、日に何本かしか走っていない路線バスが荷物だけの運搬もしてくれた。

非効率な仕事を何社もが競い合っただけのより、地域割りして互いに委託し合っただけのも悪くない。

首都圏や大都市・中都市は現行のままとし、A県B郡は日本郵便が、C郡とD郡はヤマト運輸が、E村は朝日新聞が、とかとか・・・・・・・・。

以上